

## 香港映画「桃さんの幸せ」

為我井 輝忠

久しぶりに感動的で、しかも考えさせられる映画を見ました。それは香港映画の『桃（タオ）さんのしあわせ』（原題：桃姐（A simple life））です。香港映画と言うと、どうしても派手なアクション映画を思い浮かべますが、そのアクション映画の担い手であるアンディ・ラウが今回の主演であったのは特筆すべきことです。ただ『桃さんのしあわせ』は、派手なアクション振りとは無縁のごく普通の市井の人々の物語です。

60年間、同じ家族に仕えてきたメイドの桃さん（ディニー・イップ 葉德嫻）がある日脳卒中で倒れてしまった。その日々の暮らしの中で、最低限の言葉しか交わさず、ごく当たり前身の回りの世話を任せていた雇い主の息子ロジャー（アンディ・ラウ 劉德華）は、その時初めて桃さんがかけがえのない人だったことに気が付く。

ロジャーは映画プロデューサーとしての忙しい仕事の合間を縫い、介護に奔走するが、迷惑をかけまいとする、穏やかだが芯の強い桃さん。老人を巡る社会環境の現実を目にしながらも献身的に尽くすロジャー。二人はやがて母と息子以上の絆で結ばれていくが、少しずつ老いていく桃さん……。

ストーリーはざっとこんなものです。『桃さんのしあわせ』の制作・監督は、アン・ホイ（許鞍華）は1979年、『瘋劫』で長編監督デビューし、香港ニューウェイブの旗手として注目され、さらに20本以上

の作品を監督し、様々な映画祭で受賞してきました。特に、『女人、四十。』（95年）はベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞し、彼女のテーマとする領域の本領を発揮したものと思われます。それが「老いること」、そして老いて初めて暴き出される孤独や家庭の問題等身につまされる問題に取り組んできました。

桃さんこと鐘春桃は、ディニー・イップが演じましたが、彼女は香港映画においては不可欠な女優で、この作品で彼女は中華圏の女優としてコン・リーに次いで2人目のヴェネチア国際映画祭主演女優賞に輝いています。彼女の渋みのある、いぶし銀のような演技は高峰秀子を思い出させ、私の好きな香港映画人の一人です。

今回この映画を見て、誰にも老いはやって来ること、それを誰が面倒を見るのか、身につまされる問題をいくつも身近に感じ、大いに考えさせられました。これはどの国でも起こる問題です。特に日本では、香港以上に

身に迫る問題です。私にとっても大いに考えさせられた作品でした。



\* 為我井輝忠さんは、12月より、スリランカで日本語教師を務めることになりました。滞在1年の予定です。「ディープなアジア映画鑑賞」は、この間休載し、代わりにスリランカの最新情報をお寄せくださる予定です。赤岡さんのスリランカ紹介と併せて、一層スリランカという国が身近になると思います。